

本年6月土木學會主催の群馬縣吾妻川方面視察旅行に於て、新鹿澤温泉に一泊し、群馬縣主催の懇親會に列し、熊野群馬縣知事より縣下の諸事績を紹介された事は前號に掲載した處であるが、「上毛五偉人」も前號につゞくものである。(編者)

四、高山彦九郎

京都三條大橋の袂に、一偉丈夫の御所を拜して感涙に咽ぶ銅像がある。高山彦九郎正之を知らぬ日本人は一人もあるまい。

彦九郎正之は延享4年5月8日、新田郡細谷村(今の澤野村の大字)に生れた。幼より學を好み、13歳にして大平記を手にした彼の心に蘇つたものは、400年の昔火花と散つて一物も残さぬ新田一族の鐵血勤皇の赤誠であつた。彼は實に新田16騎の一人高山遠江守重遠の子孫である。

18歳の春3月故郷を出で京都に上つた彼は先づ三條大橋に至り、橋上に跪いて容儀を正し、皇居を遙拜して「草莽の臣高山彦九郎」と聲を放つて泣いたのであつた。太平に犯れた京都の人々の眼に、この迷る上州魂はどう映じたであらうか。1日足利尊氏の墓を過ぎ、其の罪惡を數へて罵り、之を鞭つこと300にして去つたといふ。常に孝子義僕の事を聞くを悦び、路の遠近を問はず之をたづね、更に進んで其の事實を人に傳へ、感極つて聲涙共に降り、又古今君臣順逆の跡を談じては慷慨悲憤身親しく其の事に關れるが如くであつた。菅茶山の評に曰く、「彦九郎、余はたち許の時來りて一宿す。其話中古より王道の衰へし事を嘆きて、甚しき時は流涕をなす。歷代天子の御諱・御陵まで諳記して一つも誤らず。…其人鼻高く目深く口ひろく丈たかし。」と。13歳太平記により吉野朝忠臣の義烈を偲んで湧然と擡頭した勤皇の精神は、竹内式部の寶歷事件、山縣大武、藤井石門の明和事件に刺戟されて強化し、尊王論の次第に熾烈となれる京都公卿の間に出入し、殊に岩倉具選卿の殊遇を得て肝膽相照すに及び、空拳獨力草莽一介の身を以てその名が光格天皇の御聞に達するを聞き其の感激は頂點に達したのである。

われをわれとしろしめすかや

すへらきの玉の御聲のかゝるうれしさ
かくて或は京都朝野の名士と國事を謀り、更に同志

の旨を含んで、中國の志士を歴訪して九州に下り、筑後久留米に森嘉膳を訪ひ、長崎を経て熊本に入り此の地で寛政4年の春を迎へ、2月には薩摩に滞在すること百餘日、更に大隅・日向・豊後を歴遊して豊前・筑前を過ぎ、到る處の志士を訪問して、翌春4月上洛したが、時運到らず、百事意の如くならざるを憤り、再び九州に至り、6月又森嘉膳を訪ね、怏々として樂まず、滿腹の義氣遂に破裂し、俄に嘉膳の家において自刃したのである。嘉膳驚き來つて其の言はんと欲する所を問ひしに彦九郎は慨然として「余が日頃忠と思ひ義と思ひし事、皆不忠不義の事になれり。今にしてわが智の足らざるを知りぬ。故に天、われを責めて此の如く狂せしむ。天下の人に宜しく告ぐべき也。」と言ひ、終に此の世を去つた年47。寛政5年6月27日の事である。彦九郎自刃の動機は彼自身より説明は得られない。が尊號事件(光格天皇が御生父興仁親王に太上天皇の尊號を奉らんとするの思召ありしを、松平定信を老中首座とする幕府が拒絶し奉れる事件)に關關あることは想像せらる。彼の西海に於ける畫策は尋ねるに由もないが、彼の奔走の甲斐もなく、關東の威儀動かす搖がす巍然として天下に臨めるを見た時、慷慨の士、今何處に晏如たり得たであらう。薩摩軍人の夢未だ醒めず、夜半の嵐に驚き起ちてつくづく思ふ世の有様、生きて俗吏の汚辱を受けんよりばと自ら潔く刃に伏した忠誠なる心事は、實に百世の下、懦夫をして起たしむる儼があるではないか。

而も彦九郎正之は春風の如き溫情の人として、殊に幼妹に滿腔の愛情を注ぎ、深き慈育を賜はつた祖母に對する孝養は特に厚く、旅路にあつて常に音信を怠らず其の89歳を以て歿するに及んでは墓側に喪屋を替み3年の喪に服して哀痛の情を表した。かうして彦九郎は徳あり、識あり之を貫くに至誠と感激とを以てしたのである。丹念に記された數多い日記の隨所に見出される多數の和歌は、何れも事實に直面して卒直にして純眞、忠誠の至情と孝慈、友交の溫